

「奥の細道」より

1 草の戸も住み替る代ぞひなの家

季語 ひなの家
切れ字 ぞ

① 2 行春や鳥啼魚の目は泪

季語 春
切れ字 や

1 ● 3 あらとうと青葉若葉の日の光

季語 青葉 若葉
切れ字

2 ● 4 剃捨て黒髪山に衣更・・・曾良

季語 衣更
切れ字

② 5 暫時は滝に籠るや夏の初

季語 夏
切れ字 や

3 ● 6 かさねとは八重撫子の名成べし・・・曾良

季語 撫子
切れ字 (命令形や形容詞の活用などの切字か?)

7 夏山に足駄を拝む首途哉

季語 夏山
切れ字 哉

8 木啄も庵はやぶらず夏木立

季語 夏木立
切れ字 ず

9 野を横に馬牽むけよほととぎす

季語 ほととぎす
切れ字 よ

10 田一枚植て立去る柳かな

季語

柳

切れ字

かな

11 卯の花をかざしに関の晴着かな・・・曾良

季語

卯の花

切れ字

かな

③ 12 風流の初やおくの田植うた

季語

田植

切れ字

や

④ 13 世の人の見付ぬ花や軒の栗

季語

栗の花

切れ字

や

⑤ 14 早苗とる手もとや昔しのぶ摺

季語

早苗

切れ字

や

15 笈も太刀も五月にかざれかみのぼり昏幟

季語

五月

切れ字

れ

4 ● 16 笠島はいづこさ月のぬかり道

季語

さ月

切れ字

17 桜より松は二木を三月越シ

季語

桜

切れ字

し（命令形や形容詞の活用などの切字か？）

5 ● 18 あやめ草足むすはに結ん草鞋の緒

季語
切れ字
あやめ草

⑥ 19 松島や鶴に身をかれほととぎす・・・曾良
季語
ほととぎす
切れ字
や

⑦ 20 夏草や兵どもが夢の跡
季語
夏草
切れ字
や

21 卯の花に兼房みゆる白毛かな・・・曾良
季語
卯の花
切れ字
かな

⑧ 22 五月雨の降のこしてや光堂
季語
五月雨
切れ字
や

6 ● 23 蚤虱馬の尿する枕もと
季語
蚤虱
切れ字

24 涼しさを我宿にしてねまる也
季語
涼し
切れ字
也

25 這出よかひやが下のひきの声
季語
ひき
切れ字
よ

7 ● 26 まゆはきをおもかけ佛にして紅粉の花
季語
紅の花
切れ字

27 蚕飼する人は古代のすがた哉……曾良

季語 蚕養

切れ字 哉

⑨ 28 閑さや岩にしみ入蟬の声

季語 蟬の声

切れ字 や

29 五月雨をあつめて早し最上川

季語 五月雨

切れ字 し

⑩ 30 有難や雪をかほらす南谷

季語 雪(ゆきかほるで夏か?)

切れ字 や

⑪ 31 涼しさやほの三か月の羽黒山

季語 涼し

切れ字 や

8 ● 32 雲の峰幾つ崩て月の山

季語 雲の峰

切れ字

33 語られぬ湯殿にぬらす袂かな

季語 かな

切れ字 かな

34 湯殿山銭ふむ道の泪かな……曾良

季語 かな

切れ字 かな

⑫ 35 あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

季語 夕すゞみ

切れ字 や

9 ● 36 暑き日を海にいたり最上川

季語 暑き日

切れ字

⑬ 37 象潟きさかたや雨に西施がねぶの花

季語 ねぶの花

切れ字 や

⑭ 38 汐越きつこや鶴はぎぬれて海涼し

季語 涼し

切れ字 や

⑮ 39 象潟きさかたや料理何くふ神祭……曾良

季語 祭

切れ字 や

⑯ 40 蚕あまの家やや戸板を敷て夕涼……低耳(みのの国の商人)

季語 夕涼

切れ字 や

⑰ 41 波こえぬ契ありてやみさこの巢……曾良

季語 (みさこの巢で夏か?)

切れ字 や

⑱ 42 文月や六日も常の夜には似ず

季語 文月

切れ字 や

⑲ 43 荒海や佐渡によこたふ天河

季語 天河

切れ字 や

10 ● 44 一家に遊女もねたり萩と月

季語
切れ字
萩と月

⑳ 4 5 わせの香や分入右は有磯海
季語
切れ字
や わせ

4 6 塚も動け我泣声は秋の風
季語
切れ字
け 秋の風

㉑ 4 7 秋涼し手毎にむけや瓜茄子
季語
切れ字
や 秋涼し

1 1 ● 4 8 あかくつれなくと日は難面つれなくもあきの風
季語
切れ字
あきの風

㉒ 4 9 しほらしき名や小松吹萩すゝき
季語
切れ字
や 萩すゝき

1 2 ● 5 0 むざんやな甲かぶとの下のきりぐす
季語
切れ字
きりぎりす

5 1 石山の石より白し秋の風
季語
切れ字
し 秋の風

㉓ 5 2 山中や菊はたおらぬ湯の匂
季語
切れ字
や 菊

13 ● 53 行くてたふれ伏とも萩の原……曾良

季語
切れ字
萩

②4 54 今日よりや書付消さん笠の露

季語
切れ字
や 露

②5 55 終宵秋風聞やうらの山

季語
切れ字
や 秋風

②6 56 庭掃きて出ばや寺に散柳

季語
切れ字
や 散柳

57 物書て扇引さく余波哉

季語
切れ字
哉 扇

58 月清し遊行のもてる砂の上

季語
切れ字
し 月

②7 59 名月や北国日和定なき

季語
切れ字
や 名月

②8 60 寂しさや須磨にかちたる浜の秋

季語
切れ字
や 浜の秋

②61浪の間や小貝にまじる萩の塵

季語 萩の塵

切れ字 や

62蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

季語 行秋

切れ字 ぞ

○ナンバー表示…切れ字「や」の数が二十九句もある。

●ナンバー表示…切れ字が無いと思われる十三句。

切れ字「けり」はほとんど無いと思われる。

切れ字「かな」は八句。

俳句575第一回「切れ字って何」

今回は松尾芭蕉の「奥の細道」に詠まれている俳句を例にあげて考えてみたいと思います。この中には同行した蕉門曾良の5句が含まれています。

まず前記にあります俳句六十二句の内、代表的な切れ字の「や」がどのくらいあるかを調べてみました。ここでは、二十九句、約半数近くの句に、「や」という切れ字を使っています。

それでは、逆に切れ字と言われるもの十八ありますが、どれも使っていないと思われる句は、というと、十二句もあり、これは約五分の一の割合です。

「や」の他には「かな」が八句。以外なことに「けり」がありません。少し面白い結果です。芭蕉は「奥の細道」の中では、今では代表的な切れ字と言われる「けり」をほとんど使っていないのです。

この切れ字に関しては、現代までのあいだに作句の方法として実作にもとづいて確立されてきていますので、芭蕉は、「けり」をほとんど使わずに、大半は「や」を使っていたことが解ります。

切れ字の効果として、一つ使うと良いといえます。例句でもすでにそのようです。

他に、575で意味が区切り難い時に切れ字で意味が区切れていることを解り易くするという効果があります。

例えば

12 風流の初やおくの田植うた

季語 田植

切れ字 や

この句では、

風流の

初や

おくの

田植うた

と、四つのフレーズが組み合わせられています。そこで、「や」を使い芭蕉は、奥州に入って初めて聞く風雅な田植え歌に感動しているのであろうことが解ります。これが、もし

風流や

おくの

初の

田植うた

こう詠んでいたらどうでしょうか。なんと風雅なのであろうか、初めて聞く奥州の田植え歌は。となり、歌そのものが風雅であることに感動して詠んだ句となります。

このように、切れ字は、575のリズムを整えるだけでは無く、句の意味を区切る役割も大きいことが解ります。

それでは、切れ字の無い句は、575のリズムの区切れが無いのか、考えてみましょう。

例えば

3 あらとうと青葉若葉の日の光

季語 青葉若葉
切れ字

この句では

あらとうと

青葉若葉の

日の光り

となります。ちゃんと575です。このような句は所謂切れ字はありませんが、句の意味でも、リズムとしても3フレーズにきちんと整えられています。

句意は

なんとまあ尊いことでしょう。青葉若葉の濃淡とりどりの木々の緑にふりそそぐ夏の日の光よ。

他にもこのように切れ字が無いと思われる句が十一句あると思います。

ここでは、切れ字があるかないかで、俳句の575がいかにかにまとめられているのかを芭蕉の「奥の細道」の俳句から考えていますが、この句の中では、あまり切れ字があるなしは関係無いようです。

いかに、発句から、独立した俳句としてなり立った句かは、やはり句意が上手くまとめられているかどうかのようです。

つまり、575の十七文字の十七音が、日本語のリズムで整えられているかどうかで、「切れ字」があるかないかではないということです。